縛鎖ーバクサー

馬手男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
縛鎖ーバクサー

【Ｎコード】
Ｎ７４４４Ｙ

【作者名】
馬手男

【あらすじ】
この物語はオリジナル作品です。
初投稿なので暖かく見守って頂けると幸いです。

なお、能力者モノですが、某とあるな学園物の様な作品とは趣が違い、ちょっと特殊です。
どう違うのかは読んで頂ければわかるかと思います。

世界は、籠の中に

ここは第五コロニー「希望」の中。この世界は幾重にも重なる、「重層世界」と称される世界の一つで、生まれながらに何か「能力」を持った者が住む世界。
その「能力」とは、基本として以下２つの特徴がある。
・研究により、能力には大まかな種類があり、強大さによって、その能力にも変化が起きることがわかっている。
・能力を発動すると、その能力に準じた武器や鎧、時に生物などが召喚される。

話は戻るが、「重層世界」には、勿論言語を持たぬ者、人の形相を持たぬ者、無力な者などの住む世界があるが、協定により他世界への干渉が出来ないようになっている。

そして、このコロニー「希望」には、そんな物もあったもんじゃない。
この世界には、終わりが近づいている。人々は、３つの勢力に分かたれた。
一つは「保守派」。名の通り終末を受け入れ、自らの生を全うしようとする勢力。
一つは「革新派」。こちらは、終末を受け入れず、世界を終末から救い、再び反映を得ようとする勢力。
一つは「破壊派」。運命に殺されることに憂い、自身で世界を壊し、終わらせようと考える者や、好き勝手に暴れ回る乱暴者の集う勢力。

そして、どの勢力にも荷担していないとされる人々もまた、この世界にはいる。

人々は「終末戦線」と、この戦争を呼ぶ。

縛鎖ーバクサー

この時代の学校とは便利になり、机には一人一台のパソコンが据え付けられていて、板書なども転送されてくる。だが、昔の趣を忘れない為か知らないが、授業中の回答は挙手、発言制となっている。おっと、自己紹介でもしておこう。俺は朝霧政幸（あさぎりまさゆき）。睦月学園という有名な高校に通う高校２年生だ。相当な「能力」がなければ入学は出来ない。

はっきり言うと自分は簡単に入学した。なぜなら、

朝霧家はこの世界でも五本の指に数えられる権力を持つ家柄だ。

頭角を現したのは現頭首の父の先代、つまりは祖父なのだが、上流に台頭して日が浅い為か敵視する者も多い。

その血筋あってか俺自身の能力も相当強かった。最強には毛ほども掠りはしないが、その辺の輩なら力を見せただけで撃退できる。

祖父も父も堅牢な甲冑と両手に携える剣を召喚する「騎士級」の能力者だが、母の所為かその流れを変え「戦機級」という、はっきり言ってとても強力で、それを保有する能力者の数も少ない能力だそうだ。

能力自体はシンプルで、１０メートル近くの大きさの機動兵器を召喚、それに搭乗するというものだ。操縦も脳波を完治しての半自動なので、自分の体のスケールが大きくなっただけ。と思えば楽々なのだ。

とまあ、頼まれてもいない解説を長々とした訳なのだが、今はとてつもなくヤバい状況下にある。どんなだって？

そりゃあ、授業中寝てて、当てられたのさ。

座学ははっきり言えばダメダメだ。さっぱりわからん。

隣の席からメールで答えが送られてくる。

（馬鹿、やめろ！バレるんだぞ、これ！うわ、送るな！）
「そこ、何やっている！・・・もういい、座れ。後で指導室へ来るように、いいな！？」

こってり搾られた。
毎度の事だが、やはり疲れる。
「もう、マサ君が居眠りなんてするからだよ。ぶーぶー。」
隣で何か言ってるが、無視しよう。
彼女は幼なじみの露月美悠（つゆつきみゆ）。赤いリボンのポニーテールと、巨乳がトレードマークだ。
成績は良く、高校生として見ても能力もその力もなかなかで家事全般も出来る上美人と、逸材だ。だが、要領が悪い。そこ、よくある設定とか言うな。
話せば長くなるので割愛するが、露月家は歴史ある名家だ。

そして、彼女の能力は「狙撃級」なのだが格が違い、銃から弓までのお馴染みの遠距離武器から、人間には到底扱えない巨大な砲塔まで召喚、使役できる。
彼女自身でも扱えない大きさの物まで召喚出来るので、それを敢えて出し、それを俺の能力によって扱うという荒業までできる。
俺が座学で弱い分、実技試験をこいつとペアでやったおかげで進級できている。
感謝の言葉も出ないくらいだ。
勿論仲は良いが、恋人だとか、そういう関係ではない。俺としては好みなのだが・・・ゲフンゲフン。
「・・から、聞いてる？ちょっとー？」
「あぁ、聞いてるよ。聞いてる。」

「ならいいけどさ、じゃあ、どこ行こうか？」
「行くって？え、あれ？」
何を言ってるんだこの巨乳は。
「だーかーらー！今日の帰りにどっか寄ろうかー？って話！聞いてないじゃん！」
両手を上げて文句を垂れる。胸が揺れる。いいぞもっとやれ。
「あー。そうか、すまんすまん。じゃ、お前の好きなロイホ行くか。」
「ホント！？行く行くぅ！」
飛び跳ねる。胸も髪も揺れる。至福。
そうそう、ロイホとは通称で、本当はロイヤルホープと言う。
格コロニーにチェーン展開する、有名な飲食店だ。
美悠はとかくロイホを気に入っていて、何かあっても「ロイホ行こうか。」で片がつく。なんと扱いやすい。
と言うわけでロイホに行くことになった訳だが、

それは次回だっ！

ほつれた籠は、穢れた光を零して（前書き）

縛鎖ーバクサーの第3話です。

ほつれた籠は、穢れた光を零して

空が落ちる。キィともゴウとも言えぬ嘶きを吐きながら。
その有様は感覚阻止の能力によって、当事者しか判別出来ない。
外を見ようにも、内からではただの虚像が視界に広がるだけだった。

「という訳で露月サン。今度のオススメは何デスカー？」
「んふー。よく聞いてくれたねー！えっとねー・・・。」
いつもこの質問から始まる。もう何度目かわからない応酬につい口調もあからさまになる。
「これだよ、じゃーん！」
蟹ピラフの味噌和えだった。

ここ、ロイヤルホープことロイホは、その名に違わず貴族や名家の要望を店舗毎だが、聞き入れる姿勢をもっている。
当の美悠は、俺とロイホに来る度に自分が考案したメニューをオススメしてくる。じゃないとご機嫌を取りきれないのだ。

「あ、合うのか？味噌。合わないよな？うん。」
「合うよ！美味しいもん！ただ私が食べてみたことがないだけで、この組み合わせは画期的な味なんだから！」
おおう。食べてないのですか、露月の姫君は。
「じゃあまず、お前が食べてみろ。そこから検討してやる。」
「むー・・・。わかったよ。食べるよ～。」

蟹ピラフの味噌和え、到着。
「いただきま～す！」
あむあむ。と、どう出しているのかわからない擬音と共に、表情が固まり、顔が青ざめてくる。

「うっ。」
なんかヤバそうだ。
（ドッスン。）
なんかおかしな音と共に飲み込んだ。
ついでに聞いてみる。
「どうだ？味の方は。」
「不味いよ。うん。でもね？マサ君。ずっと噛んでて、飲み込んだらね？その、不味いの通り越して逆に、清々しくなっちゃったー・・・。」
「よし、食わん。」
たまったもんじゃない。
そんな物食べられるのは辛うじてこいつだけなのに、俺が食べたら死ぬ！死んでしまう！
「やぁ、お二人さん。今日も仲良くデートかい？」
うわっ出たっ！
「何の用だ、御門。」
武土御門（たけつちみかど）。同じクラスのイケメンで、中学時代からの友人だ。
こいつは人当たりは良いが、嫌う人間はとことん嫌う。イケメンが勿体無い奴だ。
だが、こいつとは気も合い、仲良くやらせてもらっている。

因みに、御門の能力は様々な要素を基に練り上げる魔術を用いる「魔術級」と思いきや、剣まで召喚し扱えるという「法剣級」に位置している。
魔術も剣も、専門の能力者に比べればやや劣るが、組み合わせて戦うと、これが中々に強い。おまけに頭も切れる奴だから、能力の使役も上手い。成績も良いと来た優等生だ。
ただ、どうしてか名家の者ではない。

「それにしても蟹ピラフの味噌和えだなんて、また大層おかしな物

を・・・。どれ。」
「ちょ、お前、やめろ！死ぬぞ！」
何の躊躇いもなく口へと運ぶ、そして一口。
「う、旨い・・・。何だこの旨さは！この奇抜なメニュー、という事はまた露月さんの考案かい！？」
「うん、そうだけど・・・。美味しいの？それ。」
「勿論さ！もし良かったら全部頂けるかい？何分、不味そうにしてたから・・・。」「別に、いいけど・・・。」

そう、こういう奴なのだ、こいつは。
味覚破綻者で、美悠の考案したメニューを毎度美味しく平らげる。
見ててびっく「うおあ！？」「きゃっ！？」「何だ！？」
一瞬、激しい激突の様な振動と共に店内が荒れる。
「何が起こったんだ・・・？」
店内は一部が崩壊している他、異変は無い。なので外に出てみれば、
「なんだ、これは・・・！」
空が割れている。否、空が『見えている』。

コロニーは丸いカプセル型の構造で、内部には人工の空があり、人工の太陽光が照らし、人々が生活している。そのコロニーは、墜落した。否、落とされたのだ。
破壊派の仕業ではない。何故なら、全てのコロニーが落ちたからだ。

コロニーの大地が割れている。当然だ。コロニーは墜落した瞬間、外壁も内壁も、殆どが粉微塵になったからだ。
しかし不可解な点が残る。
コロニーは墜落した、だが、死者が出ていなかったのだ。
誰一人として。

ほつれた籠は、穢れた光を零して（後書き）

コロニーの墜落、「希望」を失う世界。

一刻と迫る終末。

世界は、変わるのだろうか。

良くも、悪しきも。何か、変化は起こるのか・・・？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7444y/

縛鎖ーバクサー

2011年11月22日23時54分発行